南山大学における LGBTQ＋学生に関する現状・ニーズ調査

Survey on the Current Situation and Needs of LGBTQ＋Students at Nanzan University

池　田　　満

Mitsuru Ikeda

要　約

A survey was conducted among students at Nanzan University to assess the current situation and needs related to LGBTQ＋. Based on responses from 275 participants, it was revealed that 24.5% of students identified as “LGBTQ＋individuals.” The study revealed that over 40% of non-LGBTQ＋students have had experiences interacting with LGBTQ＋individuals, highlighting that LGBTQ＋is one of the pressing issues to address at Nanzan University. The analysis highlighted several areas for improvement within Nanzan University, including a culture based on stereotypical views of sexuality, corresponding behaviors, and institutional and facility-related aspects. However, there were also expectations for change, with specific requests such as creating spaces for acquiring knowledge about LGBTQ＋and improving institutional policies and facilities.

問題と目的

2023 年 6 月，「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」（LGBT 理解増進法）が施行され，学校は，教育又は啓発，教育環境の整備，相談の機会の確保等を通して LGBTQ＋に関する理解の増進に努めることが求められるようになった。LGBT 理解増進法の施行以前から，2015 年には文部科学省が「性同一性障害に関する児童生徒への対応」，続く 2016 年には「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」という通知を発し，学校教育の現場において LGBTQ＋全般についての理解と配慮を求める動きを見せている。また 2018 年には日本学生支援機構が，LGBTQ＋に対する大学教職員の理解増進を図ることを目的に，「大学等における性的指向・性自認の多様な在り方の理解増進に向けて」という冊子を文部科学省や有識者の協力を得て作成，発行している。

こうした求めの中，大学において LGBTQ＋に対する理解を深め，当事者学生への対応を改善す

るための動きが加速している。例えば，LGBTQ＋に関する具体的な行動指針を示したガイドライン等を策定している大学は 2020 年時点では約 1 割（風間他，2021）だったのが，2022 年には 3 割にまで増加している（渡邉他，2023）。この傾向は LGBT 理解増進法の施行後にさらに加速していくだろう。

南山大学では「人間の尊厳のために」という教育モットーの下，多様性を受容し尊重するポリシーを掲げているが，LGBTQ＋に関わるガイドライン等の策定には至っておらず，その前提となる学生の現状やニーズ把握も十分に行われていない。そこで本研究では，南山大学に在学する学生を対象に LGBTQ＋に関わる南山大学の現状と学生のニーズを把握することを目的とする。

なお本稿では，多様な性的指向，性自認を包括する言葉として，池田他（2022）に倣い LGBTQ＋と記載する。また近年では，性別を男性か女性かの二つのみで分類する性別二元論自体に疑問が呈されていることや，性的指向，性自認いずれも生涯不変ではなく流動的であるという指摘もなされている（上野，2008）ことから，本調査での回答のみを元に当事者／非当事者を断定的に分類することは妥当性に欠く。そこで本稿では調査時点での暫定的な当事者性分類として，“非当事者”／“当事者”としてダブルクォーテーションを付して表記する。

方法

手続きと回答者

2023 年 11 月～ 12 月に，南山大学に在籍する学生を対象として，Google Forms を使用して匿名での調査を実施した。調査協力の呼びかけは，研究者および本研究の趣旨に賛同する南山大学の教員および学生らを通して行われた。回答が得られた 275 名の平均年齢は 20.1 歳（$SD = 1.15$）で，このうち人文学部が最多の 171 名（63.3％）で，次いで外国語学部 50 名（18.2％），国際教養学部 26 名（20.0％）であり，大学院生 1 名を含め全学部から回答者が得られた。

調査項目

同様の調査を行っている関西学院大学（飯塚・智原，2016；以下，関学），龍谷大学（龍谷大学人権問題研究委員会，2017；以下，龍谷），敬和学園大学（虎岩他，2017；以下，敬和）を参照し，本学での LGBTQ＋学生についての現状を知るために有用と思われる下記の項目からなる質問紙を構成した。

1. 学年と年齢
2. 戸籍性，性自認，性的指向（選択肢から選択）
3. 性的指向や性自認についての悩み経験（ある／ない）
4. LGBTQ＋当事者との関わり経験（ある／ない／わからない）
5. LGBTQ＋に対する南山大学のありようについての印象をたずねる項目 6 項目（「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの 5 件法）
6. 自分以外／自分に対する LGBTQ＋に関する理解のない発言や嘲笑的／差別的言動の経験（「よくある」から「まったくない」までの 4 件法）と，その内容や状況（自由記述）
7. LGBTQ＋に関して学内で困っていること（自由記述）
8. 大学や教職員に対する要望（自由記述）

結果と考察

回答者のセクシュアリティの分類

戸籍性，性自認，および性的指向の回答内容に基づき，回答者のセクシュアリティを分類した（Table 1）。

Table 1　回答者のセクシュアリティ分類

	戸籍性	性自認	性的指向	*N*	%
“当事者”（67 人 24.5%）	女性	女性	女性	4	1.5
			その他	41	15.0
		男性	女性	—	—
			男性	—	—
			その他	—	—
		その他	女性	—	—
			男性	2	0.7
			その他	7	2.6
	男性	女性	女性	—	—
			男性	1	0.4
			その他	1	0.4
		男性	男性	3	1.1
			その他	7	2.6
		その他	女性	1	0.4
			男性	—	—
			その他	—	—
“非当事者”（206 人 75.5%）	男性	男性	女性	48	17.6
	女性	女性	男性	158	57.9

注）未回答の項目があった 2 名を除く。性自認の「その他」のカテゴリーには「X ジェンダー（男性または女性のいずれか一方にだけ決定できない）」,「その他」,「わからない」という回答を，性的指向の「その他」のカテゴリーには「性別を問わない」,「特定の人を好きにならない」,「その他」,「わからない」という回答を含む。

本調査で“当事者”に該当する回答者は 67 名（24.5%）と多く，中でも性的指向がその他に分類される人の割合が大きかった（約 20%）が，この傾向は他大学の結果でも類似している（“当事者”；関学：40%[1)]，龍谷：25%[2)]，敬和：15.3%，性的指向がその他；関学：26.4%，龍谷：21.0%，敬和：12.8%）。これは大学生以外を含む母集団を対象に行われた他の調査（例えば，LGBT 総合研究所，2019 など）の多くで，LGBTQ＋人口が約 10%と推計されているのと比べて際立って大きい割合である。

1）関学の報告ではトランスジェンダーに該当する回答者の性的指向を分類に含めていないため，これより多い可能性がある。

2）龍谷の調査は学生だけでなく，教職員も対象に含んでいる。

このように一般を対象とした調査と大学での調査との間で乖離が生じる原因として，本調査を含め大学での調査の多くが回答者を無作為抽出していないため，回答者の多くが LGBTQ＋関心を持つ人や“当事者”に偏っていた可能性が推測される。

またサンプリング以外にも，調査手法の課題から，LGBTQ＋当事者人口を正しく推計することが困難であるという指摘がされている（釜野，2019）。例えば，本研究では性的指向について「あなたが好きになる相手の性は何ですか（性的指向）」とたずねているが，「好きになる」という言葉には，性的魅力，恋愛感情，実際の性行為経験，交際経験などの概念が混在している。Copen et al.（2016）の調査では，出生時の性別が男性で性的魅力を感じる相手が異性と回答した人の 2.3％が同性との性行為経験があると回答している。その他にも方法論的課題から，本調査を含めいずれの調査においても，LGBTQ＋当事者の人口推計の妥当性が課題となっている。

一方で，回答者の世代の影響についても考慮が必要であろう。10 代から 20 代の人はメディアや SNS，友人関係の中で LGBTQ＋に関する情報に触れる機会が多く，ある程度理解していると自認している人が多いと言われていることから（SHIBUYA 109 Lab.，2021），自身のセクシュアリティについて考えた経験や，明確な自認を確立している人が多い可能性も考えられる。

性自認／性的指向についての悩み経験

Table 2 は，性自認／性的指向についての悩み経験の有無について，“非当事者”の回答のみを集計したものである。本調査において“非当事者”と分類される人であっても，31 名（15.0％）が性自認もしくは性的指向についての悩み経験を有していた。これは性自認や性的指向の流動性を傍証するものと言えよう。

Table 2　“非当事者”の性自認，性的指向の悩み経験（人数）

	性的指向		
性自認	ない	ある	合計
ない	175	19	194
ある	10	2	12
合計	185	21	206

LGBTQ＋に対する南山大学のありようについての印象

LGBTQ＋に対する南山大学のありようについて，“当事者”群，“非当事者”×LGBTQ＋との接触経験あり群，“非当事者”×LGBTQ＋との接触経験なし群の 3 群に分けて回答の平均値を求めた。これに対して分散分析を行ったところ，「いつでもどこでも安心して周囲に自分が LGBTQ＋当事者であることを隠さずに振舞えている。」という質問への回答において群間に有意な差が見られ（Table 3；F（2，14）＝3.094，p＝.048），LSD 法による多重比較から“当事者”群に比べ“非当事者”×接触なし群が有意に高かった。すなわち“当事者”が感じているカミングアウトしづらい大学風土や環境が，LGBTQ＋と接触経験を持たない人には共有されていないと言える。

全体的な回答の傾向として，どの項目の平均値も 2（あまりそう思わない）から 3（どちらとも言えない）の範囲にあった。本学の現状には課題を感じている一方で，今後の変革の可能性も否定

Table 3　LGBTQ＋に関する南山大学のありようについての印象

質問項目	“当事者”			“非当事者”×接触経験あり			“非当事者”×接触経験なし						
	N	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*F*	*df* 1	*df* 2	*p*
LGBTQ＋にフレンドリーな大学である	68	2.63	0.809	87	2.64	0.849	85	2.73	0.777	0.36	2	154	0.698
いつでもどこでも安心して周囲に自分がLGBTQ＋当事者であることを隠さずに振舞えている。	67	2.16	0.947	85	2.34	0.907	84	2.51	0.752	3.094	2	147	0.048
LGBTQ＋について理解しているとは思えない	68	2.78	1.049	84	2.69	0.836	84	2.8	0.991	0.332	2	148	0.718
LGBTQ＋当事者であることを明かすことで，拒否されたり距離をとられたりすることがある。	67	2.43	1.118	85	2.61	0.927	84	2.61	1.018	0.644	2	147	0.527
LGBTQ＋当事者であることを明かすことで，学業や仕事で不利に働く可能性がある。	66	2.53	1.193	84	2.36	1.105	84	2.52	1.124	0.611	2	148	0.544
なにかしてもLGBTQ＋にとってよりよい環境になるとは思わないので諦めている。	66	2.55	1.192	84	2.42	0.839	84	2.38	0.968	0.425	2	142	0.654

していないことが示唆される。全項目で「どちらとも言えない」という回答が多数であったことからも，こうした回答者の認識が裏付けられるだろう。

自由記述の検討

次に自由記述で回答を求めた4項目について検討する。分析にあたり，いずれの項目も記述数が限られており記述された情報量や詳細度が一定ではないこと，具体的な言動内容とそれに対する感情反応などが記述内に混在していることから，それらを分離しながら解釈することが求められる。そこでTheme Analysisの手法を援用し，質的データからテーマを抽出し解釈を進める。なお，全自由記述内容を付録に掲載する。

LGBTQ＋に関わる理解のない発言や嘲笑的／差別的言動を見聞きした経験

対象が自分以外と自分自身，あわせて28件の回答が得られ，全体から大きく3つのテーマが抽出された。一つ目のテーマは〈ステレオタイプ的セクシュアリティ観に基づく言動〉であった（例:「彼氏／彼女はいないのか？」,「本当にそういう人がいるのか？」)。これらの発言は，性的指向や性自認の多様性を想定していなかったり，現実のものとして認識していなかったりすることに起因すると思われる。また「同性愛は生物学的に異常だ」という発言についても，人間以外の動物でも同性愛的行動が観察されることが報告されていることから（Gómez et al., 2023），実際には生物学的知識ではなくステレオタイプ的価値観に基づいていると考えられる。加えて，アセクシュアルやアロマンティックなど，恋愛感情を持たない（抱きにくい）人々の存在に関する認識の欠如もこれらの発言に分類されている。

他の例として授業で配布された資料の中に「女性にとっての幸せは結婚だ」という内容が含まれていることを指摘するものがあった。近年，学術研究の領域で人の多様性に対して慎重な研究姿勢が求められるようになっている（例えば，日本心理学会，2023）。提示された資料の詳細や，その資料を提示した教員の目的は明らかでないが，授業で使用される資料は作成された時代背景や学術的意義も多様であり，必ずしも近年のセクシュアリティ観の変化や学術領域の指針を反映しているものばかりではない。一方で，現在と異なる背景を持つことが，その資料の学術的価値を失わせるものとも限らない。したがって資料を使用すること自体が問題とされるべきではなく，提示の際に提示する意図や，資料が作成された当時と現代の価値観やパラダイムの違いなどに言及する配慮が求められるだろう。

加えて，アセクシュアル／アロマンティックが理解されないことへの困惑が回答されていた。これも，人が恋愛感情や性的欲求を抱くことを前提としている〈ステレオタイプ的セクシュアリティ観に基づく言動〉として理解できよう。

二つ目のテーマとして,〈セクシュアリティの多様性を嘲笑の対象とする言動〉がある。例えば「ホモ／レズ」という言葉の使用，同性同士で身体的な親密な関りや身体接触をしている場面を同性愛になぞらえて揶揄する言動，さらに同性愛行為を「気持ち悪い」という発言もこれに含まれる。上記の二つのテーマに対して,具体的な言動内容ではなく「いい気持ちがしない」「怒りを感じた」「傷つける発言だと思った」など,〈当事者に寄り添い共感〉する回答者の感情も記述されていた。

学内で困っていること

困っていることの記述から抽出されたテーマは〈制度･設備〉と〈わからなさ〉の二つであった。

このうち〈制度・設備〉は，多目的トイレが少ないことと学生証の性別表記に関わるものであった。

〈わからなさ〉については，「どれほどの人が困っているのか，何かしらの処置を必要としているのか」，「他者がどのように考えているのか」がわからない，あるいは「LGBTQ＋の人に対してどのように接すれば良いのかわからない人が多いのではないか」という記述などがこれに該当する。これらの記述は，わからない，という点で関連するものとして検討できるだろう。

“当事者”を理解し受け入れ，支援をする意志を持っている人はアライ（Ally）と呼ばれ，「アライの可視化」が求められている。アライであることが明示的に表現されなければ，“当事者”や他のアライからその存在が認識できないため，セクシュアリティやLGBTQ＋についての話題を避け，発言内容に慎重なってしまうかもしれない。虹色ダイバーシティ（2023）が行った調査では，アライが存在する職場は，“当事者”だけでなく“非当事者”にとっても心理的安全性が高いと認識されていることが示されており，アライが可視化されている環境は，すべての人とって自己をありのままに表現しやすい場と認識されている可能性が考えられる。

大学や教職員に対する要望

大学や教職員に対する要望として回答された記述21件のうち，名簿や学生証などへの性別表記の検討と多目的トイレの増設を要望するものなど，〈制度・設備〉に関わるものが最多であった。性別表記の取り扱いについては，大学が関連する行政文書や，身体的健康管理などの点から，現状は性別情報の取得や表記を一律に撤廃することは妥当とは言いがたい。しかし，情報の取得や表記の必要性を検討することや，その必要性についての説明責任はなされるべきであろう。

次いで多くの記述に表れたテーマは〈ステレオタイプ的セクシュアリティ観を前提とした風土の改善〉であった（例：「恋人やパートナーという言葉，もし聞くとしたら「付き合っている人いるの？」という表現にしてほしい」，「恋愛感情を抱かない人もいるということが周知されていって欲しい」）。また風土改善の手段として，〈可視化・知る機会の提供〉を求める記述も見られた。知る機会としては，授業科目として開講／継続することだけでなく，学生だけでなく教職員も含め広く多様な観点から議論をする場を求める声や，支援についての情報に対するアクセスの向上も含まれていた。授業以外の学びの場づくりや情報アクセスの整理は他大学での実践例も多く，比較的取り組みやすい要望と言えよう。

総合考察

本稿では，南山大学に在学する学生を対象とした調査結果を元に，LGBTQ＋に関わる現状とニーズを把握することを目的とした。現状を総括すると，学生証や名簿上の性別表記や多目的トイレの不足などシステム・設備上の課題，ステレオタイプ的セクシュアリティ観を前提とした風土の大きく二つの課題が浮かび上がった。こうした課題がある一方で，回答者が抱く南山大学の印象は必ずしもネガティブではなく，LGBTQ＋について理解を深める機会への要望や，今後の変革に期待する傾向も見られた。

こうした変革を進めることは必要であるが，その前提として，大学としての姿勢を明らかにし，メッセージを伝えることが重要であろう。一例として性別情報の取り扱いを考えると，大学内では，行政上の目的（文部科学省が実施している学校基本調査など）や身体的健康に関わる領域など，現

時点で戸籍性あるいは生物学的性についての情報取得を完全になくすことは難しい。したがって求められるのは，性別情報を取得，使用，表記しないという一律の運用ではなく，取得，使用目的について説明をすることである。こうした説明が学内の部署によって異なると，かえって“当事者”は不安を感じることにもつながるため，一貫した対応のための指針を大学として策定し，メッセージとして伝えることが，個別の具体的施策以前に重要となる。

先に述べたように，アライが可視化されている場は，心理的安全性の高い場と認識される。つまり大学としてのメッセージを発信し，大学全体がアライであるという姿勢を明確に示すことによって，LGBTQ＋“当事者”に限らず，すべての学生にとって安心できる教育環境の整備が実現できるだろう。

謝辞

本稿に掲載したデータの収集にあたり，Robert Croker 先生（総合政策学部），今井達也先生（外国語学部），森山貴仁先生（外国語学部），伊東留美先生（人文学部），香川容子先生（保健センター），久米雪絵先生（保健センター），林聡誌さん（学生課），南山大学セクシュアル・マイノリティサークル「虹のシーアネモネ」の学生の皆さんにご協力いただきました。また論文執筆に際し，勝山こうへいさん，平田金重さんから頂いたご助言を参考とさせていただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

Copen, C. E., Chandra, A., & Febo-Vazquez, I. (2016). Sexual behavior, sexual attraction, and sexual orientation among adults aged 18–44 in the United States: Data from the 2011–2013 national survey of family growth. *National Health Statistics Reports*, *88*, 1–14.

Gómez, J.M., Gónzalez-Megías, A. & Verdú, M. (2023). The evolution of same-sex sexual behaviour in mammals. *Nature Communication*, *14*, 5719.

飯塚諒・智原あゆみ（2016）．2016 年度 LGBT 調査報告書関西学院大学 Retrieved February 17，2024 from https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei/pdf/educational/rights/0000142381.pdf

池田 満・平田金重・勝山こうへい（2022）．LGBTQ＋当事者に対して大学生が抱く関心内容および当事者による講演会の効果についての探索的検討人間関係研究，*23*，35–50.

釜野さおり（2019）. 性的マイノリティをめぐる量的データ――ダイバーシティ推進の文脈における両義性――女性学，*26*，22–37.

風間孝・北仲千里・釜野さおり・林夏生・藤原直子（2021）．大学における性的指向・性自認（SOGI）に関する施策及び取り組みに関する全国調査報告社会科学研究，*41*（2），181–230.

LGBT 総合研究所（2019）．LGBT 意識行動調査 2019LGBT 総合研究所 RetrievedFebruary 17，2024 from https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf

日本心理学会（2023）．心理学における多様性尊重のガイドライン公益社団法人日本心理学会

虹色ダイバーシティ（2023）．niji VOICE 2022 報告書――LGBTQ の仕事と暮らしに関するアンケート調査――虹色ダイバーシティ Retrieved February 17, 2024 from https://nijibridge.jp/wp-content/uploads/2023/03/nijiVOICE2022_

report.pdf
龍谷大学人権問題研究委員会(2017)．龍谷大学におけるセクシュアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート報告書龍谷大学 Retrieved February 17，2024 from https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-7689.html
SHIBUYA 109 Lab.（2021）．Z 世代のジェンダーに対する意識調査 Retrieved February 17，2024 from https://shibuya109lab.jp/article/210518.html
虎岩朋加・Steltzer, A.・加納由季・池田しのぶ・片野彩（2017）．LGBT についての学生の理解とその課題――敬和学園大学 LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign による学生意識調査から――人文社会科学研究所年報 *15*131–147.
上野淳子（2008）．心理学における性的マイノリティ研究――教育への視座――四天王寺大学紀要，*46*，73–83.
渡邉歩・樋熊亜衣・河野禎之（2023）．大学における LGBTQ 学生対応とガイドライン策定の現状――各大学のホームページを対象とした探索的調査――大学改革・学位研究 Advanceonline publication. https://doi.org/10.32175/kaikakugakui.2024.25001

付録：自由記述

戸籍性	性自認	性的指向	自分以外を対象とした LGBTQ＋に関わる 理解のない発言や，嘲笑的／差別的言動を見聞きした経験
男性	男性	女性	「ホモはキモい」という発言。いい気はしなかった
女性	女性	男性	ホモ，レズなどの言葉を揶揄するための言葉として使用していた
男性	男性	女性	ホモの後輩がいて……という話をおもしろ話のように友人がしてきた。私は別におもしろ話という認識のフィルターにはかけず，ただの日常会話として落とし込んだ。
女性	女性	性別を問わない	ほんとにそんな人いるのか，という話題になったときや，その話題に対してそんなん見たことないとか，いるわけないという趣旨の発言を聞いたとき
女性	女性	男性	軽い気持ちで，おまえゲイだからな～と馬鹿にして発言している場面は時々みる。
男性	男性	性別を問わない	私の友人が「本来，男は女を好きになるのが生物的に当たり前な訳で，男が男を好きになるのは異常だよ。だから LGBT は一種の障害みたいなものだよね。だから障害を差別するのは可哀想だよね」と言っていました。LGBT を障がい扱いをされたのが悲しかったです。
女性	女性	わからない	女性の学生に対して，「彼氏はいないのか？」としつこく聞いている先生がいて，ジェネレーションギャップなので仕方ないことだとは思いますが，言われていない私でも嫌な気分になりました。異性が好きだというステレオタイプに加え，恋人はいた方がいいという前提を押し付けられている感じがしました。
男性	男性	女性	男子同士でふざけてイチャイチャする際に「俺ゲイじゃねーから」といった発言。正直特に何も気にならなかった。
男性	男性	女性	同性どうしで交際するまたは結婚する行為が気持ちの悪いものだと学生が話しているのを話，数回聞いたことがあります。
男性	わからない	女性	同性愛者の気持ちが分からない，理解できないと馬鹿にしたような感じで言っていて，少し怒りを感じた。
女性	女性	わからない	特定の誰かというより，同性愛一般に対して，部活動の練習中に，「私は同性愛は認めない。生物としておかしい。」という内容の発言をしている人がいた。この場に当事者がいたら不快に感じるだろうと思った。
女性	女性	男性	発言ではないが，ある授業の名簿に（おそらく）女子生徒には丸印が付いており，男女差別だと感じ，今の時代にはそぐわないと思った。
女性	女性	男性	彼女いないの？　彼氏いないの？　と異性に限定して聞く聞き方。ちょうど LGBTQ について学んでいた時だったから，良くない聞き方だと感じた。
男性	男性	女性	友人の何人かが学校以外の場所（アルバイト中やお店）でゲイの方に卑猥なことを言われたり，男性器を触られたりなどの性被害を受けたことがある。その話を友人の間で共有した時に，「ゲイってキモいな」などと言った発言を聞いた。一部のゲイの方による行動によって，ゲイではない友人にとってトラウマとなってしまった。
女性	女性	性別を問わない	SNS での投稿で見た。確か男性の性自認についての投稿だった気がするなんと言うか視野の狭い人，残念な人だなあと思った
男性	男性	女性	あまりいい気持ちはしない。

戸籍性	性自認	性的指向	自分以外を対象としたLGBTQ＋に関わる 理解のない発言や，嘲笑的／差別的言動を見聞きした経験
女性	女性	男性	気分が悪い
女性	女性	男性	具体的には思い出せないが，「この内容が授業ではなかったら（メディアだったら）LGBTQに理解がない」と騒がれそうだなーと思った事がある
女性	女性	男性	今は当事者ではないために，私がそのようなことを聞くのはまだいいが，当事者の方が聞いたらどんな気持ちになるんだろうと感じた。
未回答	その他	特定の人を好きにならない	特定の誰かに対して，ということではないが，与えられたテーマで発表を行うような課題で，テーマとなった文章の中にはLGBTQのことが書かれていたのに発表でLGBTについてになぜか変わっていて意図が気になったことはある。
女性	女性	特定の人を好きにならない	本人も悪意があるわけではなさそうだが，無意識だとしても特定の人を傷つける発言だと思った。
女性	わからない	性別を問わない	友達。LGBTQ＋について知らないんだなと思った。
女性	女性	男性	差別的な言葉は聞かない。無意識に自分たちとは違うと考えているような発言を聞くことはある。
女性	女性	特定の人を好きにならない	私は特定の人を恋愛感情として好きになったことがないのですが，恋人がいる友人からは理解が得られないことがある。恋愛をしなければならないという風潮に，排斥されている様に感じることがある。
未回答	その他	特定の人を好きにならない	自分のアイデンティティを明かしたことはないのに，セクシャルマイノリティを扱った発表を行った時に自分を同性愛者だと思ったのかな ...? とちょっと思ってしまうような質問が飛んできて面食らったことがある。
女性	女性	男性	女性にとっての幸せは結婚だ，というような内容の話が書いてある資料を配られたことがある。憤りを感じたが，教職で必修の授業であり，今後もお世話になる先生であったため抗議などはできなかった。
女性	女性	わからない	友人に，「恋人も好きな人もいないあなたとは話すことがない」と言われたことがありました。
男性	男性	特定の人を好きにならない	理解しているふりをして，きっとまだ素敵な人と出会っていないだけだよ，となぜか自分が不幸な立場にあるかのような語りをされたり，サークルの先輩に真面目ぶんな！とかモテないことの逃げ発言だ！のようにからかわれたりして疲れた。そもそも恋愛するのが当たり前で会話が進むため好きな人の話やパートナーの質問をされる回数も多くしんどい。

戸籍性	性自認	性的指向	困っていること
男性	男性	女性	LGBTQ＋について，他者がどのように考えているのかを聞き出す事が難しい。
女性	わからない	性別を問わない	LGBTQ＋の人に対してどのように接すれば良いのかわからない人が多いのではないか。
未回答	その他	特定の人を好きにならない	学生証に記載されているわずかな情報の中にもわざわざバイナリーな性別が載っているのは，意図がよくわからないなと思います。入学から 4 年間同じ性別にアイデンティティを持ち続けない方もいるはずですし，身分証にもなるとはいえ住所なども載っていないのに性別だけ記載があるのは，気持ちよく使うことはできないなと思っています。外国語の授業になると必ず，英語であれば Mr./Ms.,he/she のバイナリーな代名詞を使うことになってしまうのはどうにかして解消してくれないかなと思っています。自分はカムアウトするつもりが今のところないので先生に頼んで変えてもらうこともできないし，外国語の方が比較的代名詞の役割が大きいのである程度仕方ないのかなとは思いますが ...
男性	男性	女性	個人的にはないが，どれほどの人が困っているのか，何かしらの処置を必要としているのか見当もつかないほど分かりにくい事柄なので気になる。
女性	女性	わからない	大学で LGBTQ としての自分自身が認められている感覚を経験したことがないことです。具体的に言えば，異性を好きになるという決めつけや，恋人がいた方がいいとする考え方を押し付けられたくないです。
男性	男性	男性	大学の責任だとは思いませんが，男女が恋愛をする，ストレートの人を想定した社会が構築されているので，必然的に隠したり，嘘をついたりしなければならないことが多いので，残念です。
女性	女性	男性	日本人は LGBTQ＋の人を見極めるのがあまり上手でないため，留学生の中で LGBTQ＋の子が困った
			という話を聞いた。レズビアンなのに腕を組まれたり，スキンシップが多いと気まずいらしい。
女性	女性	男性	友人が各階に多目的トイレがないことを嘆いていました。

戸籍性	性自認	性的指向	大学や教職員への要望
男性	男性	女性	LGBTQ＋について，考え方を押し付けるような形とならないようにしつつ，議論し考える機会があっても良いと思います。
女性	女性	男性	LGBTQ＋に関する授業を続けて欲しい
女性	女性	性別を問わない	アウティングをしない
男性	男性	女性	いまだに弊学では授業の受講生徒の名簿に男女の記載があるのは，非常にナンセンスであると感じています。
女性	女性	男性	もっと学べる場を作って欲しい
男性	男性	女性	以前ゼミ長会議でトイレに多目的用がないのは配慮にかけているのではないかという話題があったので検討しても良いのかと思う
女性	女性	男性	学生だけでなく教職員や職員の方々に対するLGBTQ＋の啓発講座や講演会が実施され，参加される方が増えるとより良い学校になるのではないかと思った。
女性	女性	男性	学生証に，性別の記入欄はなくても差し支えないと思います
女性	女性	その他	学内コミュニティが少ないように感じるため，学内外のコミュニティに関する情報発信を行ってほしい。ほか，可能であれば授業内等で，LGBTQ＋に関する正しい知識や，どのような行動が偏見の表れとして当事者に受け止められているのかを知って，自分の言動を顧みる機会を作ること。
女性	女性	わからない	私のように書類上の性別と性自認が合致している人（性的指向は現段階でクエスチョニングだが）にとっては，南山大学は普通の大学だと思う。実際にLGBTQ＋への差別や無理解を目の当たりにしたわけではない。ただ，私は運良くそれらの悪意や無理解に出会わなかった可能性もある。もしLGBTQ＋に対する悪意や無理解がこの大学にあるのであれば，一刻も早く解消してほしい。
男性	男性	女性	周りにLGBTQ＋の知り合いは全くいない（カミングアウトしていないだけかも）が，人口の割合的には大学に確実にいることは私は分かっている。しかし，そのような友人を持ったことがないことなどが要因で学生のLGBTQ＋に対する理解はまだまだ足りていないと思う。性に関する授業をもっと展開するのも一つの手だと思う。
未回答	その他	特定の人を好きにならない	人間の尊厳科目を履修しようと思った時に，主にセクシャルマイノリティについて扱っている授業ではあるがシラバスを読んだ限りクィアフレンドリーではなさそうで自分には危険があると判断して履修するのを辞めた授業があって，どういう判断で授業を開講しているのか気になっていました。
女性	女性	特定の人を好きにならない	性的指向について，恋愛感情を抱かない人もいるということが周知されていって欲しい。
女性	Xジェンダー	特定の人を好きにならない	性的少数者を支援する活動を行っているサークルや部活に対して，情報面でアクセスしにくいと感じる。当事者学生が情報にアクセスしやすくなる環境を整えてほしい。
女性	女性	男性	生徒が安心して教授からの発言に疑問を持ったことを抗議できる環境整備

戸籍性	性自認	性的指向	大学や教職員への要望
女性	女性	男性	多目的トイレが少ない。現在交換留学生として留学中だが，南山大学は多目的トイレの数が明らかに少なく，性自認と実際の性にずれを感じる人にとっては，他人の目を気にしてトイレを使用することすら窮屈？億劫に感じてしまうと思う。
女性	女性	性別を問わない	多目的トイレを設置してほしい
男性	男性	男性	大学ではなくて，社会全体の意識に関する問題ではあると思うので，大学自体にはあまりないです。
女性	女性	男性	知識として学ぶのではなく，学内の雰囲気をより寛容なものになったらより良いなと感じています。
女性	女性	わからない	彼氏 / 彼女ではなく, 恋人やパートナーという言葉, もし聞くとしたら「付き合っている人いるの？」という表現にしてほしいです。
男性	男性	女性	理解は必要だと思います。